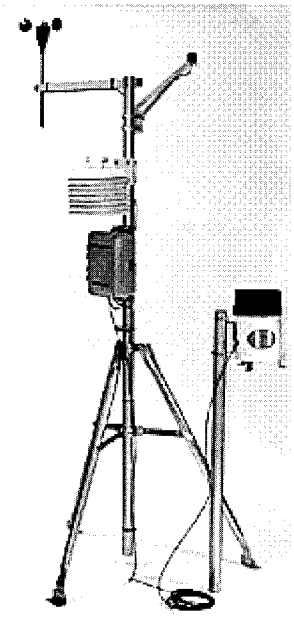
地質学雑誌　第110巻　第3号（通巻1302号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成16年3月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

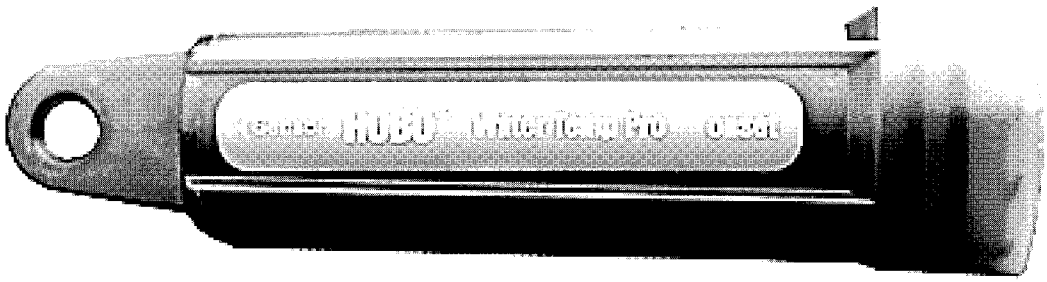
Vol.7 No.3 March 2004

ホボ ウェザー ステーション



操作性	プラグイン式スマートセンサー 配線／キャリブレーション不要 接続センサー組合せ自在 交換可能標準AAアルカリバッテリー×4ケ、寿命1年 Windows95以降対応アプリケーションソフトBoxCar Pro4.3（up）
柔軟性	観測要求センサー選択自在 （温・湿度、光量子、全天日射、風向・風速、降雨量、気圧、土壌水分） 15チャンネル　センサー入力（Max） 各種取り付け方法:2m、3mトリポッド、ポストマウント センサー取り付け高:調整可能 スタート方式:プッシュボタンorスタート時刻予約
信頼性	状態確認ランプ 低電圧バッテリー、低残量メモリー警告 不揮発性EEPROMメモリー （バッテリー切れによるデータ消失事故回避） 補助バッテリー:計測中のバッテリー交換可能
精度	リサーチグレード（詳細はセンサー仕様参照） WMO、AASC準拠センサー取り付けマウンティング

水温用データロガー



内蔵バッテリー	寿命5年
記録容量	21,580サンプル
計測範囲	水中:0℃～＋50℃　空気中:－20℃～＋70℃
精度	±0.2℃（0℃～＋50℃にて）
分解能	12ビット（0.02℃ at ＋25℃）
耐圧深度	水中30m
専用ソフト（別売）	BoxCar Pro4.3以上（Windows95以降）
計測記録間隔	最短1秒より最長9時間設定自由
寸法、重量	115mm L×30mmφ,43g
チェック機能	バッテリー状態、ロガー状態チェック機能付き

ホボ
ウォーター テンプ
プロ
H20-001
¥19,800

姉妹品
照度、雨量、電圧、電流、
ウェザーステーション、その他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 **パシコ貿易株式会社**

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目15番8号
TEL:03-3946-5621㈹　FAX:03-3946-5628
URL:http://www.pacico.co.jp　E-mail:sales@pacico.co.jp

日本地質学会*News*

Vol.7 No.3　March 2004

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル ６Ｆ
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

2004年会費払込について ……1

2005年度日本地質学会役員選挙のお知らせ
～投票締め切り：４月20日（火）必着 ……2

案内 ……5
第48回日本水環境学会セミナー：バイオマスの利用・活用と水環境/第４回残土石処分地・廃棄物最終処分場にかかわる地質汚染調査浄化技術の研修会/空間情報学の２つの国際シンポジウム

各賞・助成 ……6
平成16年度財団法人神奈川科学技術アカデミー研究助成募集

CALENDAR ……6

紹介 ……7
シリーズ環境と地質　Ⅰ～Ⅴ　B.W. Pipkin・D. D. Trent著　佐藤正・千木良雅弘監修（大森昌衛）/安山岩と大陸の起源：ローカルからグローバルへ　巽　好幸著（鎌田浩毅）

委員会だより ……9
環境地質研究委員会　環境地質学シンポジウムでの審査論文部門の新設のお知らせ

表紙紹介 ……9
現世のストロマトライト/27億年前のストロマトライト（清川昌一・白尾元理）

地学教育のページ ……10
千葉大会における学校教育委員会の取り組み　ほか

支部コーナー ……11
北海道支部　総会・例会およびシンポジウムのお知らせ/中部支部2004年支部年会開催のお知らせ/近畿支部　西日本支部　四国支部合同例会のお知らせ/西日本支部報告　第148回例会ならびに2003年度総会報告

院生コーナー ……14
第５回アジア海洋地質会議，第１回IGCP-475年会参加報告（北沢俊幸）

The Island Arcオンライン閲覧の方法 ……15

追悼　名誉会員　早川正巳先生（安間　恵） ……16

学会法人化基金：募金状況

学会法人化基金の募金状況（2004年３月９日現在）をご報告いたします．現在のところ，目標額2,000万円に対し下記の醵金をいただいております．今後とも会員の皆様からの一層のご協力をお願い申し上げます．

（日本地質学会募金委員会）

醵金総額　￥8,492,850（醵金者数　260名）

〈募金方法〉
銀行口座：みずほ銀行　神田駅前支店　普通預金　2058646
口座名：ニホンチシツガツカイボキンイインカイカトウヒロカズ（日本地質学会募金委員会　加藤碩一）
郵便振替口座：00160-3-776921　日本地質学会募金委員会

2004年の会費払込について　～次回自動引き落としは６月23日（水）です～

2004年１月～12月の会費額は下記のとおりです．未納の方には督促請求書を送付いたしますが，早急にご送金をお願いいたします．督促請求は５月末頃の予定です．

正会員	12,000円	（アイランドアーク雑誌購読料	8,000円）
〃　院生割引	8,000円	（　〃	6,000円）
準会員（旧学生会員）	5,000円	（　〃	6,000円）

１．次回自動引き落としについて（2004年およびそれ以前の会費が未入金の方対象）

次回，６月23日（水）に引き落としの予定です．まだ，会費を未入金の方で今後自動引き落としを希望される方は，「自動払込利用申込書」（２月号ニュース誌巻末掲載）をご利用の上，**５月14日（金）までにお申し込み下さい．**

２．自動引き落とし新規の申込を受け付けています．登録口座変更の場合も改めて申込書をお送りください．

学会としては自動引き落としによる払込をより多くの会員に積極的に採用していただきたく，ご理解とご協力をお願いいたします．申込は随時受け付けています．

（日本地質学会会計委員会）

広告取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

2005年度日本地質学会役員選挙のお知らせ

投票締め切り　4月20日（火）必着

会則第21条ならびに選挙細則に基づき，代議員の選挙を行いますので，お知らせいたします．

今回改選するのは会長1名，副会長2名，代議員200名です（全国区：任期1.5年50名，2.5年50名・地方区：任期1.5年50名，2.5年50名）．立候補受付は2月末日で締め切り，下記の方々が立候補されました．会長，副会長の立候補者は定員を超えませんでしたので，選挙細則第4条7項に従い，第1回選挙管理委員会（3月3日開催）で当選といたしました．代議員につきましては，任期1.5年・2.5年とも地方区で立候補が定員を超えないところがあり，これらの地方区の候補者も無投票当選となります．したがって，今回は代議員のみの選挙で，各任期の全国区と地方区の一部について投票をしていただきます．投票用紙ならびに候補者名簿は正会員に対し，3月中旬に郵便でお送りしました．投票締め切りは4月20日（火）（必着）となっております．

例年，出し忘れや締め切りを過ぎてから到着するものがあります．お手元に届き次第，候補者名簿をよくご覧になって，お早めに投函されますようお願いいたします．

開票は4月24日（土）午前9時から地質学会事務室で行います．また，開票結果は地質学会ホームページ，ニュース誌5月号に掲載いたします．

2004年3月3日
日本地質学会選挙管理委員会　委員長　手塚裕樹
委員　小布施明子　坂本正徳　塚本　　斉　宮城晴耕

会長・副会長候補者名簿（氏名・勤務先）（会員名簿順）

※立候補者が定員を超えなかったため，選挙細則第4条7項に従い，第1回選挙管理委員会にて当選とした

会　長

斎藤　靖二	国立科学博物館	当選※

副会長

加藤　碩一	産業技術総合研究所	当選※
木村　　学	東京大学	当選※

代議員候補者名簿（氏名・勤務先）（受付，会員名簿順に掲載）

※印の地方区は，立候補者が定員を超えなかったため，選挙細則第4条7項に従い，第1回選挙管理委員会にて当選とした．

〈全国区1.5年（定員50）〉

1	小嶋　　智	岐阜大学
2	会田　信行	千葉県立佐倉東高校
3	足立　　守	名古屋大学
4	阿部なつ江	海洋科学技術センター
5	石渡　　明	金沢大学
6	倉本　真一	海洋科学技術センター
7	坂本　竜彦	海洋科学技術センター
8	長谷川　卓	金沢大学
9	長谷部徳子	金沢大学
10	眞砂　英樹	東京大学
11	狩野　謙一	静岡大学
12	北村　晃寿	静岡大学
13	公文富士夫	信州大学
14	斎藤　実篤	海洋科学技術センター
15	酒井　治孝	九州大学
16	榊原　正幸	愛媛大学
17	徐　　垣	海洋科学技術センター
18	高澤　栄一	新潟大学
19	高橋　雅紀	産業技術総合研究所
20	豊島　剛志	新潟大学
21	鳥海　光弘	東京大学
22	平島　崇男	京都大学
23	増田　俊明	静岡大学
24	松岡　　篤	新潟大学
25	道林　克禎	静岡大学
26	三次　徳二	東京学芸大学附属高校
27	山北　　聡	宮崎大学
28	渡辺　真人	産業技術総合研究所
29	足立　勝治	アジア航測（株）
30	梅田美由紀	福井市自然史博物館
31	加々島慎一	山形大学
32	加藤　　進	石油資源開発（株）
33	滝田　良基	（株）ニュージェック
34	田村　嘉之	（財）千葉県環境財団
35	八尾　　昭	大阪市立大学
36	小山内康人	岡山大学
37	紺谷　吉弘	立命館高校
38	佐々木和彦	応用地質（株）
39	芝川　明義	大阪府立狭山高校
40	多田　隆治	東京大学
41	徳山　英一	東京大学
42	丸山　茂徳	東京工業大学
43	石井　正之	明治コンサルタント（株）
44	岡　　孝雄	北海道立地質研究所
45	神谷　英利	京都大学
46	鈴木　徳行	北海道大学
47	高橋　　修	東京学芸大学
48	新井田清信	北海道大学
49	早坂　康隆	広島大学
50	岩田　尊夫	帝国石油（株）
51	大塚　裕之	鹿児島大学
52	坂島　俊彦	パシフィックコンサルタンツ（株）
53	佐藤　博明	神戸大学
54	柴崎　直明	国際航業（株）
55	中下　惠勇	（株）建設技術研究所

56　仲谷　英夫　香川大学
57　長谷　義隆　熊本大学
58　松田　博貴　熊本大学
59　宮本　隆実　広島大学
60　赤羽　久忠　富山市科学文化センター
61　浅野　俊雄　東京都立大森高校
62　石垣　　忍　林原自然科学博物館
63　大村亜希子　産業技術総合研究所
64　海保　邦夫　東北大学
65　椚座圭太郎　富山大学
66　高田　　亮　産業技術総合研究所
67　今岡　照喜　山口大学
68　大河内　誠　アイドールエンジニヤリング（株）
69　嶋本　利彦　京都大学
70　長濱　裕幸　東北大学
71　久田健一郎　筑波大学

〈地方区1.5年〉

北海道（定員２）

1　在田　一則　北海道大学
2　雁沢　好博　北海道教育大学函館校
3　徳江　俊一　応用地質（株）

東北（定員４）

1　武藤　　潤　東北大学
2　長橋　良隆　福島大学
3　飛田　健二　応用地質（株）
4　山野井　徹　山形大学
5　島本　昌憲　東北大学総合学術博物館

関東（定員19）

1　青野　道夫　（株）サンコア
2　中山　俊雄　東京都土木技術研究所
3　氏家恒太郎　海洋科学技術センター
4　鈴木　宇耕　海洋科学技術センター
5　浦辺　徹郎　東京大学
6　木村　克己　産業技術総合研究所
7　平　　朝彦　海洋科学技術センター
8　浜田　　毅　茨城大学
9　松原　典孝　茨城大学
10　金松　敏也　海洋科学技術センター
11　中井　睦美　大東文化大学
12　山口はるか　海洋科学技術センタ
13　佐藤　尚弘　明治コンサルタント（株）
14　青島　睦治　栃木県立博物館
15　楠田　　隆　千葉県環境研究センター
16　向山　　栄　国際航業（株）
17　吉岡　　正　応用地質（株）
18　角替　敏昭　筑波大学
19　方違　重治　（株）東建ジオテック

中部（定員９）

1　酒寄　淳史　金沢大学
2　佐々木圭一　金沢学院大学
3　東田　和弘　名古屋大学
4　星野　光雄　名古屋大学
5　山本　博文　福井大学
6　立石　雅昭　新潟大学
7　竹之内　耕　フォッサマグナミュージアム
8　角田　謙朗　山梨大学
9　寺尾　真純　長野県臼田高校
10　延原　尊美　静岡大学
11　森田　康裕　応用地質（株）
12　吉田　孝紀　信州大学
13　今村　哲己　帝国石油（株）
14　杉本　幹博　金沢大学

近畿（定員６）※

1　石井　和彦　大阪府立大学
2　前島　　渉　大阪市立大学
3　小畑　正明　京都大学
4　宮田　隆夫　神戸大学
5　中村　康雄　中央開発（株）
6　吉川　周作　大阪市立大学

四国（定員２）※

1　近藤　康生　高知大学
2　岩井　雅夫　高知大学

西日本（定員８）※

1　石賀　裕明　島根大学
2　松末　和之　応用地質（株）
3　木戸　道男　福岡県立黒木高校
4　柴田　次夫　岡山大学
5　福田　泰英　基礎地盤コンサルタンツ（株）
6　藤井　厚志　北九州市立自然史・歴史博物館
7　木村　政昭　琉球大学
8　佐野　弘好　九州大学

〈全国区2.5年（定員50）〉

1　脇田　浩二　産業技術総合研究所
2　楡井　　久　茨城大学
3　安間　　恵　川崎地質（株）
4　上砂　正一　明治コンサルタント（株）
5　柴　　正博　東海大学社会教育センター・博物館
6　高木　秀雄　早稲田大学
7　川端　清司　大阪市立自然史博物館
8　堀　　利栄　愛媛大学
9　斎藤　　眞　産業技術総合研究所
10　大友　幸子　山形大学
11　荒井　章司　金沢大学
12　榎並　正樹　名古屋大学
13　永広　昌之　東北大学総合学術博物館
14　竹内　　誠　名古屋大学
15　田崎　和江　金沢大学
16　廣野　哲朗　海洋科学技術センター
17　森下　知晃　金沢大学
18　阿部　国広　川崎市立西有馬小学校
19　天野　一男　茨城大学
20　磯﨑　行雄　東京大学
21　卜部　厚志　新潟大学
22　岡田　　誠　茨城大学
23　奥平　敬元　大阪市立大学
24　亀井　淳志　産業技術総合研究所
25　北里　　洋　海洋科学技術センター
26　清川　昌一　九州大学
27　志村　俊昭　新潟大学
28　鈴木祐一郎　産業技術総合研究所
29　関　　陽児　産業技術総合研究所
30　巽　　好幸　海洋科学技術センター
31　七山　　太　産業技術総合研究所
32　納谷　友規　茨城大学
33　新妻　信明　静岡大学
34　藤縄　明彦　茨城大学
35　藤林　紀枝　新潟大学
36　星　　博幸　愛知教育大学
37　保柳　康一　信州大学
38　松本　　良　東京大学

※：定員を超えず，無投票当選

39　三宅　康幸　信州大学
40　宮下　純夫　新潟大学
41　宮下由香里　産業技術総合研究所
42　矢島　道子　東京都成徳学園
43　吉田　武義　東北大学
44　国安　　稔　石油資源開発（株）
45　能條　　歩　北海道教育大学岩見沢校
46　伊藤　　慎　千葉大学
47　川幡　穂高　産業技術総合研究所
48　宮地　良典　産業技術総合研究所
49　山路　　敦　京都大学
50　木村　純一　島根大学
51　竹内　　章　富山大学
52　田近　　淳　北海道立地質研究所
53　中川　光弘　北海道大学
54　増田富士雄　京都大学
55　松本　俊幸　国際航業（株）
56　秋葉　文雄　（有）珪藻ミニラボ
57　荒戸　裕之　帝国石油（株）
58　井龍　康文　東北大学
59　川野　良信　佐賀大学
60　黒田登美雄　琉球大学
61　坂井　　卓　九州大学
62　土谷　信高　岩手大学
63　板谷　徹丸　岡山理科大学
64　大藤　　茂　富山大学
65　桑水流淳二　鹿児島県立博物館
66　高橋　正樹　日本大学
67　吉倉　紳一　高知大学
68　小林　哲夫　鹿児島大学
69　横山　俊治　高知大学

〈地方区2.5年〉

北海道（定員２）※
1　都郷　義寛　北海道教育大学岩見沢校
2　前田仁一郎　北海道大学

東北（定員４）※
1　川田　祐介　東北大学
2　橋本　修一　東北電力（株）
3　川村　寿郎　宮城教育大学
4　鎌田耕太郎　弘前大学

関東（定員19）
1　笠間　友博　神奈川県立青少年センター
2　山本　高司　川崎地質（株）
3　坂口　有人　海洋科学技術センター
4　荒井　晃作　産業技術総合研究所
5　伊藤　谷生　千葉大学
6　利光　誠一　産業技術総合研究所
7　町山　栄章　海洋科学技術センター
8　森田　澄人　産業技術総合研究所
9　渡部　芳夫　産業技術総合研究所
10　芦　寿一郎　東京大学
11　猪俣　道也　東京農業大学
12　小澤　一仁　東京大学
13　安藤　　伸　応用地質（株）
14　森田　宜史　帝国石油（株）
15　植村　和彦　国立科学博物館
16　高橋　直樹　千葉県中央博物館
17　外田　智千　極地研究所
18　松居誠一郎　宇都宮大学
19　緒方　信一　中央開発（株）
20　府川　宗雄　なし

中部（定員９）
1　小井土由光　岐阜大学
2　加藤　道雄　金沢大学
3　鈴木　和博　名古屋大学
4　中川登美雄　福井県立丸岡高校
5　沓掛　俊夫　愛知大学
6　栗田　裕司　新潟大学
7　周藤　賢治　新潟大学
8　塚原　弘昭　信州大学
9　林　　愛明　静岡大学
10　三宅　　明　愛知教育大学
11　清水　正之　富山県立立山博物館
12　原山　　智　信州大学

近畿（定員６）※
1　三田村宗樹　大阪市立大学
2　田上　高広　京都大学
3　前川　寛和　大阪府立大学
4　升本　眞二　大阪市立大学
5　林田　　明　同志社大学
6　此松　昌彦　和歌山大学

四国（定員２）
1　村田　明広　徳島大学
2　寺林　　優　香川大学
3　佐野　　栄　愛媛大学

西日本（定員８）※
1　大木　公彦　鹿児島大学総合研究博物館
2　三宅　　誠　岡山県浅口郡里庄町立里庄中学校
3　池上　直樹　御船町恐竜博物館
4　奥野　　充　福岡大学
5　西園　幸久　西日本技術開発（株）
6　宮田雄一郎　山口大学
7　山崎　博史　広島大学
8　鈴木　清一　福岡教育大学

※：定員を超えず，無投票当選

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第48回日本水環境学会セミナー：バイオマスの利用・活用と水環境

地球温暖化防止，循環型社会の形成などを背景として，バイオマス・ニッポン総合戦略が閣議決定され，取り組みが開始されています．このバイオマス・ニッポンは，内閣府，農林水産省，文部科学省，経済産業省，国土交通省，環境省が一体となって策定し，バイオマスの利活用を促進する取り組みです．本セミナーでは，バイオマスに関する国の動向と有機系排水，有機系廃棄物を利用したバイオマス活用事例を水処理との関わりも含めて講演いただきたいと思います．関係業界の皆様や，行政さらには市民団体など，多くの皆様の参加をお待ちしています．

主　催　（社）日本水環境学会
期　日　**2004年５月28日（金）**
場　所　早稲田大学理工学部（大久保キャンパス）55号館大会議室
参加費　会　員　7,000円　非会員　14,000円
　　学生会員　3,000円
定　員　150名
申込方法
FAX，E-mail，またはハガキに①参加者氏名（フリガナ），②会員・非会員の別，③会員の場合は会員番号，④連絡先（所属団体名，住所および電話・FAX番号）をご記入の上，下記宛てお申し込み下さい，また，参加費を５月20日までにお振り込み下さい．入金を確認後，参加証（ハガキ）をお送りいたします．

参加費振込先
東京三菱銀行市ヶ谷支店
（普通）０７５４９５０
（社）日本水環境学会セミナー口

申し込み・問い合わせ先
（社）日本水環境学会　セミナー係
〒135-0006　東京都江東区常盤２-９-７
リーンプラザ深川常盤201号
電話03-3632-5351　Fax. 03-3632-5352
E-mail：tamura@jswe.or.jp

第４回残土石処分地・廃棄物最終処分場にかかわる地質汚染調査浄化技術の研修会
—おもに重金属等を対象に—

「土壌汚染対策法」が施行されて１年が経過し，「指定調査機関」も1322社（2003年11月現在）にのぼります．しかし，地質汚染（地層汚染・地下水汚染・地下空気汚染）の確かな調査浄化技術をもたない未熟な技術者が，調査浄化をする中でかえって汚染を拡大させてしまった事例も後をたちません．

長年の研究成果と現場経験に裏打ちされた当NPOが主催する技術研修会は，わが国でもっとも信頼と権威あるものと評価されています．表記のおもに重金属汚染を対象とした技術研修会を開催いたしますので，高度でたしかな技術力習得の機会としてぜひ受講されることをお奨めいたします．なお，この講習会は当NPOが高度な技術と現場経験を有し，高い環境倫理観をもった技術者として認証する，地質汚染診断士の受験資格ともなっております．

NPO法人　日本地質汚染審査機構
理事長　楡井　久

日　時：**５月26日（水）～29日（土）**
主　催：NPO法人　日本地質汚染審査機構
共　催：日本地質学会環境地質研究委員会
　　茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター
協　賛：千葉県生活環境部・茨城県生活環境部・潮来市・鹿嶋市・神栖町・佐原市・銚子市（交渉中）
主会場：潮来ホテル（JR潮来駅前）
副会場：茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター・佐原市残土石置場サイト
会　費：会員65,000円・非会員70,000円・大学院生50,000円（宿泊費・食費・懇親会費を含む．）
定　員：50名（定員になり次第締め切ります．大学院生は最大10名まで）
プログラム詳細はhttp://homepage1.nifty.com/npo-geopol/をご覧下さい．

申込・問合せ先
NPO法人日本地質汚染審査機構
Tel：03-5655-6201　Fax：03-5655-6202
E-mail：npo-geopol@nifty.com
受講希望者は，氏名・所属・連絡先（電話，FAX，Eメール），性別，年齢，部屋の禁煙・喫煙，その他希望についてお知らせ下さい．

空間情報学の２つの国際シンポジウム

(1) International Symposium on Geoinfomatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences (GIS-IDEAS 2004)：2004年9月16日～18日
(2) Free and Open Source (FOSS) for Geoinformatics GIS - GRASS Users Conference 2004：2004年9月12日～14日

標記の２つの空間情報学に関する国際会議が本年９月に．前者は16日～18日にベトナム，ハノイで，後者は12日～14日にタイ，バンコクで開催される．両者ともに地質学に関連しており，２つとも参加できるように開催日時が設定されている．標記の空間情報学は、空間データの取得、保管、管理、解析ならびに視覚化などを扱う基礎科学と技術を包含するものである．

前者は，2001年に結成された「日本-ベトナム空間情報学連合」（Japan Vietnam Geoinformatics Consortium，略称 JVGC）の主催によるものである．空間情報学の最近の著しい進歩を背景として，日本とベトナム両国の活発な科学的交流の推進に重点が置かれ，２年ごとのフォーラムの開催が目的の第一である．その主な活動として，空間情報学に関連するさまざまな分野にわたり，両国の研究者・技術者と研究・技術交流の推進、情報科学教育，新技術や機器の開発などが重点項目として示されている（下記）．

＊リモートセンシング（RS）技術とその応用
＊地理情報システム（GIS）とデータベース構築技術
＊資源・環境・災害アセスメントのためのRSおよびGISの適合性
＊空間情報学のためのソフトとアルゴリズム
＊空間データの視覚化と3D-GIS技術
＊オンライン空間情報システムの構築とそのコミュニケーション
＊空間情報データベースの有用性・利便性と標準化

なお，JVGCは緩い連合体組織であり，会費もとらず，個人・団体を問わず，誰もが参加できる．諸般の事情から筆者が日本の代表を務め，実質的な事務局は，日本情報地質学会があたっている．JVGCの活動の第一歩として、2002年9月25日から28日にかけて，「地球科学および関連科学の空間情報学シンポジウム」（GIS-IDEAS 2002）がハノイ市で開催された．参加者はほぼ200名に達し、ベトナムと日本以外に、タイ・アメリカ・カナダ・ドイツの各国から参加者があった．今回のシンポジウム開催にあたり，主催者のJVGCの活動に対してベトナムの日本大使館の全面的なサポートが得られる見通しである．さらに，今後も日本政府および関係機関の援助が期待できる．

詳細は下記のＵＲＬを参照して頂きたい．
ＪＶＧＣ：http://gisws.media.osaka-cu.ac.jp/jvgc/
シンポジウム（1）：
http://gisws.media.osaka-cu.ac.jp/gisideas04/
シンポジウム（2）：
http://gisws.media.osaka-cu.ac.jp/grass04/
日本情報地質学会：http://www.jsgi.org/

（文責：**藤田　崇**）

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，理事会までお申し込み下さい．

平成16年度財団法人神奈川科学技術アカデミー研究助成募集

募集対象：神奈川県内在勤または在住の若手研究者（おおむね40歳以下）が行う先端的科学技術分野の研究

応募方法：下記宛に募集案内をご請求下さい．申請書の様式は，当財団ホームページからもダウンロードできます．
（http://www.kast.or.jp）

応募〆切：**2004年4月9日（金）**

案内請求先：
財団法人　神奈川科学技術アカデミー
教育交流部　交流普及課
〒213-0012　川崎市高津区坂戸3-2-1
KSP西棟614
電話　044-819-2032　FAX　044-819-2097
e-mail: sc@kast.or.jp

CALENDAR

2004.3～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

4月　April

○日本堆積学会2004年例会
4月23日（火）～26日（日）
場所：広島大学理学部
http://sediment.jp

5月　May

○地球惑星科学関連学会合同大会2004年合同大会
5月9日（日）～13日（木）
会場：幕張メッセ　国際会議場
http://www.epsu.jp/jmoo2004/main.html

○平成16年度（社）砂防学会総会・研究発表会
5月18日（火）～20日（木）
場所：宮崎観光ホテル
http://www.jsece.or.jp/event/conf/2004/index.html

○第48回日本水環境学会セミナー・バイオマスの利用・活用と水環境
5月28日（金）
場所　早稲田大学理工学部55号館大会議
http://www.jswe.or.jp/index-j.html

○日本地下水学会2004年春季講演会
5月29日（土）
場所：千葉大学
http://www.groundwater.jp/jagh/home.htm

☆日本地質学会北海道支部総会・例会およびシンポジウム
5月29日（土）～30日（日）
場所：北海道教育大学旭川校
http://www.geosociety.jp

6月　June

☆近畿支部・西日本支部・四国支部合同例会
6月5日（土）～6日（日）
場所：京都大学理学部6号館
http://www.geosociety.jp

○地質学史懇話会例会
6月12日（土）13：30～17：00
会場：北とぴあ（東京・王子）
http://www.geocities.com/jahigeo/jahigeo51.html

☆日本地質学会中部支部・年会
6月12日（土）～13日（日）
12日：総会・シンポジウム「日本海と本州弧の形成・発展」・懇親会
13日：地質巡検
会場：富山大学理学部
http://www.geosociety.jp

○資源地質学会第54回年会
6月15日（火）～17日（木）
会場：東京大学山上会館
http://www.kt.rim.or.jp/~srg/

○石油技術協会平成16年度春季講演会
6月16日（水）～17日（木）
場所：札幌市
http://www.japt.org/

7月　July

○第41回理工学における同位元素・放射線研究発表会
7月7日（水）～9日（金）
会場　日本青年館（新宿区霞岳町15番地）
http://www.jrias.or.jp/

○第39回地盤工学研究発表会
7月7日（水）～9日（金）
会場：朱鷺メッセ　（新潟コンベンションセンター）
http://www.jiban.or.jp/

○19th Himalaya-Karakorum-Tibet Workshop
7月10～12日
場所：北海道ニセコ・ニセコ東山プリンスホテル
http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~arita/HKT/index.html

○第10回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会
7月14日（水）～16日（金）
場所：大阪国際交流センター
http://www.groundwater.jp/jagh/home.htm

8月　August

○The 32nd International Geological Congress 2004（IGC）
8月20日（金）～28日（土）
場所：Florence, Italy
http://www.32igc.org/home.htm

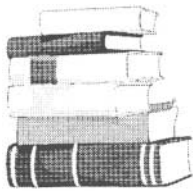
9月　September

☆日本地質学会第111年総会・年会
9月18日（土）～20日（月）
場所：千葉大学
http://www.geosociety.jp

11月　November

○TECNO-OCEAN 2004 IN KOBE
11月9日（火）～12日（金）
場所：神戸コンベンションセンター（神戸市）
http://www.oceans-technoocean2004.com/

○2004年世界アスベスト東京会議
11月19日（金）～21日（日）
場所：東京・早稲田大学国際会議場
http://park3.wakwak.com/~gac2004



紹　介

シリーズ環境と地質　Ⅰ～Ⅴ

Geology and the Environment
B.W. Pipkin・D. D. Trent著
佐藤　正・千木良雅弘監修
全国地質調査業協会連合会
環境地質翻訳委員会訳

古今書院　2003年11月22日発行，
A４変形判，569ページ，５分冊，
各巻定価3500円＋税
原著出版社：Brooks/Core a division of Thomson Learning, 2001
ISBN4-7722-3037-8，〃-3038-6，〃-3039-4，〃-3040-8，〃-3041-6

原著は大学の教養課程の教科書として，自然科学の素養のない学生を対象として執筆されたもので，著者のB.W.ピプキンは南カリフォルニア大学の名誉教授で，カリフォルニア州公認の土木技術博士を取得し，巨大ダムや道路建設など各種のプロジェクトに参加し，応用地質学者として活躍する傍ら多くの地質学に関する著書を出版している．D.D.トレントはユタ州やアラスカ州で石油探査に従事する傍らカリフォルニア州の大学で野外地質の講義を担当している．

本書の執筆に際して，１）地質の原理や，地質事象の機構，過程を検証し，２）人間活動と地質との関連性を説き，３）市民生活を進める過程で，環境問題や災害問題に対して読者が主体的意見を構築するのに必要な素養を与えることを目的としている．

原著書の構成は，序文と15章にまたがる本文の末尾に補われた付録から成っている．序文では，環境地質学を「人類と人類をとりまく地質環境との関係を探求するダイナミックな学問」と定義し，地質災害に対処するためには，地球科学に関する教養が重要であるとしている．末尾にアポロ14号の宇宙飛行士であったEdger Mitchelの言葉（下線部）を引用して，「地球は多くの生命を維持することができるが，その許容量は今限界に達しており，私たちはこの星を守らねばならない．二度目のチャンスはないのだから」と結んでいる．

本文は次の15章に分けて記述されている。

第１章「人類と地質と環境」では，環境地質学の研究対象や環境地質学者の役割を，第２章「地質と地球と時間」は，地球システム，地球物質，地球年代などの地質学の基本問題を，第３章「プレートテクトニクス」は，大陸漂移説，海洋底拡大説，汎地球理論を解説している．

第４章「地震と人間活動」では，地震の性質，発震機構や災害に言及し，第５章「火山」は，火山活動の恩恵と災害，災害抑制と予知問題などに，第６章「土壌と風化と侵食」では，土壌の種類と侵食を解説し，土壌と健康にふれている．

第７章「マスウェイスティングと地盤沈下」では，土地の流動，地すべり発生の要因，マスウェイスティングによる損害の防御と安定化から，地盤沈下の機構と分類・対策を説き，第８章「淡水資源」は，水源の場所と分布，節水と代替水源の問題を，第９章「河川災害」は，河川系の基礎，河川の特徴，洪水への対応を説いている．

第10章「沿岸環境」は，風波，海浜侵食，ハリケーンと海岸洪水などを解説し，第11章「氷河作用と長期機構変動」は，氷河作用とその影響，気候変動，現在の地球温暖化の原因と影響および対策を，第12章「砂漠化」は，砂漠の種類と砂漠化などを説いている．

第13章「鉱物資源と社会」は，鉱物の存在量と分布，鉱物の起源と貯留，将来の鉱物資源，鉱物としての環境への影響，鉱山の土地再生，鉱業の未来を説き，第14章「エネルギーと資源」は，非在来型化石燃料，化石燃料燃焼の問題，未来のエネルギー，核エネルギー，核廃棄物の処分，海からのエネルギーについて解説し，第15章「廃棄物処理と地質」は，都市廃棄物の抱える問題や廃水処理を社会学の視野から記述し，巻末付録に，周期表・主な造岩鉱物など５表を補っている．

本書の特色は，次のような点にある．

１）各章の冒頭に，読者の思考のモティベーションとして，関連する事象の写真を添えて環境や災害にかかわる問題点を指摘している．２）本文では理解の起訴となる項目について，カラーによる豊富な図表，写真を添えて解説している．３）読者の理解を深めるため，具体的事象をケーススタディとして補っている．４）ギャラリーという項目で，各章の課題に関連する特異な景観や事象をカラー写真で示している．５）本文の随所に「考えてみよう」という設問コーナーを設けて，読者の思考の整理と演繹を促している．６）章末の「まとめ」では，重要な用語を列挙し，「調べてみよう」という見出しで若干の演習問題を提示し，末尾に読者の学習に必要な参考書と定期刊行物のほか，コンピューターのWebサイトによって得られるホームページの題名を挙げている．

翻訳書の出版は，平成13（2001）年６月に日本学術会議で行われた「地質工学および関連分野における技術者養成と大学教育」と題する地質科学シンポジウムの席上で，大矢暁氏（当時全国地質調査業協会連合会技術委員会委員長）が本書の野心的構成と本書の特色を紹介した折り，会場に出席していた古今書院編集者関田伸雄氏が紹介者の熱意と本書の特色に共鳴し，後日本書の訳書の出版を上記連合会に申し出たことに始まる．

連合会は関田氏の申し出を受けとめ，連合会内に加盟する各社の技術者18名で構成する翻訳委員会（代表，田中荘一氏）を設けて作業を行い，連合会の40周年記念行事として古今書院から出版したものである．

訳書のシリーズは，１・２章を併せて「環境と地質」と題する分冊（１～55頁），３～６章をまとめて「地震と火山と侵食」と題する分冊（56～202頁），７～10章を「水環境と地盤災害」とした分冊（203～346頁），11，12，13章を「地球環境と社会」という表題でまとめた分冊（347～449頁）と14，15章を併せて「エネルギーと廃棄物」と題した分冊（450～569頁）の５分冊に分けている．各分冊に，著者紹介，訳者まえがき，全冊目次，序文が掲載されており，末尾に付録，アイウエオ順の用語解説，索引と図表写真の出典を記したクレジットが付されている．

訳者が指摘しているように，われわれの身辺で起きている環境や災害の問題は，すべて地質学の知識を基礎としての対応が求められている．そのために，地質家や地質技術家の活躍の分野は拡大しつつある．しかしながら，教育の現場とくに小・中・高校の教育体系のなかでの地学科の占める比重は必ずしも十分とはいえない．そのため本書の内容は，日本における地質学教育をめぐる現状とは乖離している感がある．本書が単に，環境地質学に関する優れた解説書であるばかりでなく，同時に本書が日本における学校教育や生涯教育における地質学が果たすべき役割について，貴重な問題を提起していることを考えねばならない．さらに本書の構成が，“教える立場”ではなく，現実に起こっている自然界の地学事象の中で，“ともに観察しながら学ぶ”という地学学習の原点に立つ姿勢で執筆されていることも，“地質学の最良の学習の場は，フィールドにある”ことを改めて考えさせられる．地質学関係者の一読が望まれる．

本書はまた，学校教育における理科や社会科の実施の際のワークブックや，大学教養課程での野外実習を伴った教科書，さらに地方自治体の環境行政実施の際の指針として利用され，地質学の社会における効用が改めて見直されるための契機となることを期待したい．

（大森昌衛）

安山岩と大陸の起源：ローカルからグローバルへ

巽　好幸 著

東京大学出版会　2003年発行，A５版，
215ページ，定価3800円
ISBN：4130607464

本書は，安山岩の成因と地球内部ダイナミクスについてグローバルテクトニクスの文脈で論じた意欲的な教科書である．著者は火山岩を主な研究対象とする岩石学者であり，現在，海洋科学技術センターの地球内部物質循環研究領域長を務め，OD21海洋掘削プロジェクトを積極的に推進している．日本地質学会の関連としては，著者はThe Island Arc誌の編集長を昨年末まで務め，また2003年度には，沈み込み帯のマグマ学的研究に対して日本地質学会賞を最年少で受賞した．

本書は，第１章問題設定，第２章瀬戸内火山帯，第３章高Mg安山岩の成因，第４章カルクアルカリ安山岩の成因，第５章大陸地殻の成因，第６章マントルの進化，という章立てになっている．目次にも明らかなように，岩石化学領域でのデータ提示に基づいた解釈と議論が縦横無尽に展開され，島弧火山岩の成因論から大陸の起源までが幅広く論じられている．特に，著者が最初に研究を始めた瀬戸内火山帯の岩石学から，マントル全体の岩石学的な進化にまで順次対象を拡げていくという書き方をしている．

本書は，８年前に出された前著（『沈み込み帯のマグマ学』，1995年，東京大学出版会）の続編という性格をもっている．前著と同様に，著者の研究歴を反映したきわめてユニークな本となっている．持ち前の論理をぐいぐいと押していくような書き方で，島弧の火山岩から大陸の起源まで一気にかつ緻密に議論を展開している．島弧火山岩研究から大陸地殻の岩石学へと地球科学にとって重要なテーマに次々と挑戦する著者の研究の軌跡をうかがい知ることができる．著者の提唱するサブダクションファクトリーの考え方を解説した最終章は，とりわけ興味深い．著者が久しぶりに書き上げた本書は，前著を超える充実した内容となっている．

著者自身，この本の執筆中に何編もの原著論文ができあがったことを語っている．教科書としても瑕疵のないように改めて火成岩成因論のレビューを行う過程で，研究の視座が広がっていったからである．この広がり方は，沈み込み帯に産する火山岩研究のトップランナーから，全地球のダイナミクスへと研究を拡大した経歴と重なっている．原著論文の対象を大陸の起源へと視野を広げた総まとめが，本書の出版というわけである．著者にとって単行本を書くことが，新たな研究の展開にとって明らかにプラスに作用している．

巻末には本書で取り上げられたテーマに関する引用文献が網羅されており，本書の理解に役立つだけでなく，火山岩岩石学の研究史が展望できる．中でも，著者がfirst authorとなっている論文が３ページにわたって引用されているのは，本書の特徴を物語っている．本書に挿入された図版の大部分は，著者の論文から引用されたものである．標準的な教科書を書こうとしたのではなく，自らの発想とオリジナリティーを前面に押し出したのが本書である．

これまで著者は多数の原著論文を発表するだけでなく，沈み込み帯の火成活動に関する英語版教科書（『Subduction Zone Magmatism』, Tatsumi and Eggins, 1995, Blackwell Publisher）も書いている．教科書を書く意義は，著者の研究の整理のためだけにはとどまらない．このような本を書く意義そのものについて少し考えてみたい．

世界中で書かれる科学論文の約７割は，米国で生産されている．米国の科学研究の興隆は，この国で優れた教科書や啓発書が次々と書かれてきたことと無縁ではない．最先端の研究成果が生まれるためには，それを支える若い研究者の集団が必要である．米国の世界的な研究者は，優れた教科書を書いている．出来の良い教科書は，優秀な研究者の卵を育てる．のちに世界的な業績を挙げるようになった研究者は，新たに優れた本を書く．米国の科学の底の厚さは，このような良い循環の基に生み出されている．基礎科学の研究を興隆させようと意図したら，教育に積極的に投資しなければならない．著者による和文２冊，英文１冊の教科書執筆は，著者の教育に対する積極的な姿勢の現れでもある．

本書には，著者が卒論・修論で行った瀬戸内火山岩の研究が思い出深く語られている．瀬戸内火山帯は最もデータの完備した島弧の一つとなっている．これには著者による貢献が大きい．著者の岩石学事始めに関するエピソードは，興味深いものの一つである．

小豆島はフィールドワーク事始めの地である．高Mg安山岩成因論を引っさげて学界デビューを果たした直後の1983年に，著者は小豆島の火山地質に関する記載論文を地質学雑誌に発表している．この島は著者の思い入れの深い土地であり，今でもサンプリングに出かけるそうである．しかし，100kgを超える巨体を崖の上に持ち上げるのは，昔日のごとく軽々（？）とはいかないらしい．とはいえ，小豆島の地質に愛着を持ちつづけている著者の姿が現れている．例えば，評者の研究とも近いアズキ火山灰の逸話が詳しく載せられていること（本書29ページ）などが興味深い．

質の良いフィールドデータに対する高い認識は，本書の底流にある思想でもある．本書は「ローカルからグローバルへ」という副題がつけられているように，地球科学の基本問題を解くにあたっての地域地質学の重要性を指摘している．岩石成因論の教科書でこの点が強調されているのは，注目されるべきであろう．

全体の書き方に関して，若干問題となる点も指摘しておきたい．本書の各章には，それだけで一冊の本になるような膨大な内容が盛り込まれている．豊富な議論の展開はもちろん必要なものであるが，全てを詰め込みすぎている感も免れない．事実と事実，事実と解釈をつなぐ解説がもっと用意されないと，内容を完全にフォローするのは困難である．おそらく岩石学を専攻している大学院生にも，本書を細部まで理解するのは難しいのではないかという危惧が若干残る．

火山岩岩石学者の Wes Hildreth は，かつて教科書と総説論文を書く要諦について私に語ったことがある．「intensiveだけでなくextensiveに書けているかどうかが正否を決める．さらにexpansiveになっていれば成功だ」と彼は言った．聞くところによると，著者は本書を４ヶ月余りで書き上げたとのことである．おそらく今回著者は，intensiveに集中するあまり，extensiveとexpansiveに配慮する余裕はなかったものと推察される．あるいは，著者はそれを承知の上で「読みこなしてみんかい！」と挑発しているのかも知れない．例えば，読者がじっくり読み込んでもらうことによってのみ，extensiveかつexpansiveなものになりうる，という考えも成り立つであろう．「全てを教えて貰うなんて，科学者のすることではない」という著者の一喝が聞こえてきそうである．ともあれ，著者の今回の選択が本書の価値を下げているわけでは決してないが，この課題は，今後の著書において応えて欲しいと評者は願っている．太陽系固体惑星の岩石成因論に関するintensive，extensive，expansiveな著書が上梓されることを期待したい．

最後に，本書の中に挿入されているショート・エッセイ「おじさんの独り言」にも触れておきたい．ここには主に研究上の小話が載せられているが，著者の研究現場を知る上で大変興味深い．エッセイには著者の横顔を描いた漫画も添えられている．各項の内容に合わせて異なるカットを用いるという細かな芸も見せている．最後の項では，大学の地球科学研究の現状を憂いて，頭上の火山がついに噴火する（本書189ページ）．前著（『沈み込み帯のマグマ学』）に挿入されていた「コーヒーブレイク」とともに，著者のユーモラスな性格があらわれており，文字どおり横顔を彷彿とさせる．

本書は，火山岩岩石学と地球内部ダイナミクスを学びたい者に大いに有益な本である．特に，一人の優れた岩石学者の研究アイデアの進展をたどることができる点で極めてスリリングな本でもある．多くの大学院生と地質学研究者に推薦したい．

（京都大学　**鎌田浩毅**）

委 員 会 だ よ り

☆環境地質研究委員会

環境地質学シンポジウムでの審査論文部門の新設のお知らせ

従来から，環境地質学シンポジウムの際，講演参加者より，同シンポジウム論文集については査読審査を行ってほしいとの強い要望がありました．また，地質学における環境に関する学術雑誌は，従来の名称にEnvironmentを付けたものはあるものの，体系的に地質環境について取り扱っているものはPargamon Press社発行のEnvironmental Geologyのみです．しかし，地質環境の枠を越えた環境地質全般を取り扱っているものはありません．また，国内で環境地質に関する学術雑誌も今のところありません．このようなことから，第13回環境地質学シンポジウムでの委員会活動報告において参加いただいた方々との議論，環境地質学シンポジウム論文集編集委員会（以下単に論文集編集委員会と記す）での議論を踏まえて，第14回環境地質学シンポジウム（2004年晩秋東京近郊にて開催予定）の時からは，環境地質学シンポジウム論文集の作成にあたっては従来どおりの一般発表論文に加え，論文集編集委員会による厳正なる査読審査を行った審査発表論文も平行して掲載することとしました．なお，査読発表論文部門への申込者の方も，原則的には一般発表論文部門の申込者同様に講演もしていただきます．

従来どおりの一般発表論文とは，シンポジウムの講演者が講演内奥をあらかじめ執筆した論文のことで，当日参加者に配布される「環境地質学シンポジウム論文集」に掲載されます．書式は論文集編集委員会により定められていますが，原則的には著者の責任で作成されます．ただし，内容が著しく論文集にそぐわない場合や体裁が著しく異なる場合は編集責任者が執筆者に変更を求めることがあります．

今後，従来の一般発表論文は「報告」，厳正なる査読を行った審査発表論文は「論説」と名称を付け，２種類の原稿を今後平行して扱っていくこととなります．また，論説につきましては査読に時間がかかるため，この査読発表論文部門への発表の申込みは原稿とともに７月31日（必着）で第14回環境地質学シンポジウム実行委員会宛てにお送りいただくこととなります．従来からの，一般発表論文部門への申込みにつきましては，従来どおり９月25日までに申し込みいただき，論文は第14回環境地質学シンポジウム実行委員会へ10月31日必着といたします．

・査読発表論文部門への発表の申込：７月31日
・従来からの一般発表論文部門への申込：９月25日

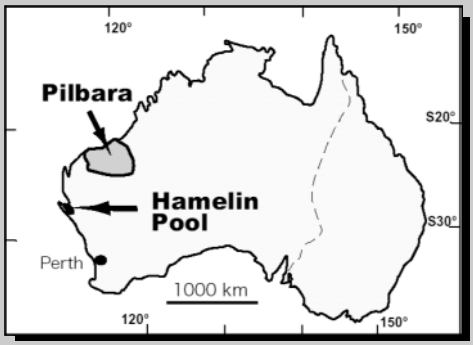
申込みに関する詳細なことや，審査発表論文の書き方の詳細については，地質学会ニュースの次号及び日本地質学会環境地質研究委員会ホームページ（http://www.bekkoame.ne.jp/~jcengeo）に掲載いたします．審査発表論文部門へ申し込まれる方は，原稿の〆切日を見据えて，早めにご準備ください．

（環境地質研究委員会　**風岡　修**　o.kzok@mc.pref.chiba.jp）

表 紙 紹 介

現世のストロマトライト：西オーストラリア・ハメリンプール

Recent stromatolites in Hamelin Pool, Western Australia.



ハメリンプールは西オーストラリアの最西端に位置し，“太古の化石”ストロマトライトが生息する場所として有名である．ここのストロマトライトは，1987年にNHKが放映した地球大紀行によって世界的に有名なり，1991年にハメリンプールを含むシャーク湾全体が世界遺産に登録された．

ハメリンプールは乾燥気候で内湾にあるため，塩分濃度が平均海水の２倍以上もある．このため他の生物は生息困難で，ストロマトライトは外敵に脅かされることなく，成長することができた．ストロマトライトは，光合成をするシアノバクテリアが重なり合って作られたバイオマットである．特にキャベツ状のものは，太古代の化石（裏表紙）とよく似ている．潮の満干は１日２回あり，写真のストロマトライトは水没直後であるが，潮が引いてくると丸い頭を水面からのぞかせる．

（裏）27億年前のストロマトライト：西オーストラリア，ピルバラクラトン上に分布するフォーテスキュー層群タンビアーナ層

2.7 billon years-old Late Archean stromatolites: the Tumbiana Formation in the Hamersley Group on the Pilbara craton, Western Australia.

このストロマトライトは，ピルバラクラトン上に堆積したマウントブルース超層群の地層中にある．27億年前は世界的に火成活動が著しく，ピルバラクラトンでも洪水玄武岩が何回も噴出していた時代である．このストロマトライト層は，洪水玄武岩噴出の休止期に生息したもので，東西200km南北100kmに広がっている．大陸縁の浅海に果てしなく繁茂したストロマトライトは光合成によって，それ以前には大気中に１％以下しか酸素のなかった地球を，酸素の豊かな地球に変えていったと考えられている．

（文：**清川昌一**　Shoichi　KIYOKAWA　写真：**白尾元理**　Motomaro SHIRAO）

地学教育のページ

○千葉大会における学校教育委員会の取り組み

地学教育・地学史セッション

学校における地学教育の実践を学会は期待しています．今から新年度準備とあわせてポスター，講演の準備をお願いします．

シンポジウム「これからの地学教育」

昨年度静岡大会での地学教育セッション「地学教育の現状と未来」の趣旨を引継いで開催されるものです．静岡大会では，小・中・高等学校・大学・博物館，それぞれの教育現場からの現況が報告されましたが，今回のシンポジウムは，さらに具体的な内容にふみこみ，私たちはこれからどのような地学教育をめざしていくのかについて，参加者の方々とともに考えていきたいと思います．

広い分野からの多くの参加者を希望します．そして，これからの地学教育の方向性や未来について，御討論・御議論いただき，少しでも多くの共通理解をもてればと考えています．

（担当　学校教育委員会　高橋　修）

第３回教師地質巡検

一昨年の新潟大会以来ほぼ定着してきた「教師地質巡検（教師向け普及巡検）」は，９月12日（日）に予定しています．地元の「千葉県地学教育研究会」との共催も予定しており，コース等を検討中です．皆さんのご期待に添える形で実施できることと思いますので，ふるってご参加ください．

（担当　学校教育委員会　府川宗雄）

小さな Earth Scientistのつどい
～第２回小，中，高校生徒「地学研究」発表会～

千葉大会において小，中，高校における地学研究の発表の場として，「小さな Earth Scientist のつどい」を企画しています．今回は，昨年度の静岡大会の成果と教訓をふまえ，高校の地学クラブのみならず，授業における児童・生徒の研究発表も募集いたします．多数の参加をお願いします．

なお，学会という機会に，地学を研究する児童・生徒同士の交流のみならず，研究者との交流も進むことを願っています．学会会場内に発表会の場を用意する予定です．会員の方々も是非お立ち寄りください．発表会の詳細については，次号以降にお知らせします．

（担当　学校教育委員会　三次徳二・小野　洋）

夜間小集会「博物館教育と学校教育の連携を（仮題）」

生涯教育委員会との共催で本年も夜間小集会を行います．今まで博物館教育と学校教育がいかに連携し，地球科学教育の普及と振興に寄与していくか探ってきました．小集会の中では青少年に地学の楽しさを伝えるために，各地の博物館の取り組みが紹介され，学校教育の中にも取り入れていく活動や，学校が博物館との打ち合わせのもとに，地域に根付いた地学を組み立て，実践している姿が紹介されてきました．しかし，学校や博物館，科学センター等の抱えている現状は厳しいものがあり，この状況をいかに打開していくかの議論も行ってきました．

今年度は博物館の側から地学が衰退している学校教育に対して理科教育の中に現場教員を巻き込みながらいかに児童，生徒に地学の楽しさや大切さを理解させる教育を作り出していくかを，いくつかの博物館の取り組みの報告を受けながら議論したいと考えています．

（担当　生涯教育委員長　柴正博・学校教育委員長　阿部国広）

＜お願い＞

近年学校現場ではいろいろな制約から，研究活動に時間がとれない状況が続いています．しかし地学教育の普及と発展のためにも，**是非今年のスケジュールに地質学会の千葉大会を加えていただきますようお願いいたします．**

昨年静岡大会での地学研究発表会の様子．来場者からの質問に一生懸命応える高校生．

○お知らせ：気象教育に関する懸賞論文が公募されています

財団法人日本気象協会より，気象に関する懸賞論文が募集されています．今年度のテーマは，「これからの気象教育」です．応募資格はありませんので，関心のある方はどなたでも応募できます．**締切は2004年９月10日です．**応募規定については，日本気象協会のホームページ（http://www.jwa.or.jp/）をご覧いただくか，日本気象協会管理部事業課（Tel 03-5958-8111）までお問い合わせ下さい．

○お知らせ：2004年度「青少年のための科学の祭典」全国大会出展希望調査票の送付始まる

今年で12回を迎える「青少年のための科学の祭典」の全国大会の出展希望調査票の配布が始まりました．今年の祭典は７月29日～８月３日の６日間を前半29日～31日，後半８月１日～３日科学技術館で行われる予定です．

科学の祭典全国大会は５万人を超える青少年が訪れ，自然科学に親しんで帰ります．毎年この日を楽しみにしている青少年たちが数多くいます．

日本地質学会では大地の姿，営みに目を注ぎ，地球の歴史，営みに触れ少しでも地球科学の面白さを知ってもらおうと大会の後援を行い，多くの地質学会員が市民，教師と共に参加し体験型の演じ実験を行っています．しかし，大会では物理，生物関係にブースが集中し，地学関係のブースはまだまだ少数です．21世紀の地球科学研究を担う青少年を一人でも多く私たちの仲間として迎え入れる活動が求められています．この機会にぜひお力をお貸しください．「科学の祭典」出展希望調査票を取り寄せ，応募し，出展していただきますよう心から呼びかけます．

＜出展希望調査票入手方法＞

FAX・ハガキ・E-mailのいずれかに住所・氏名・TEL・「出展調査票希望」と明記の上科学の祭典事務局までご連絡下さい．

〒102-0091　東京都千代田区北の丸公園2-1　日本科学技術振興財団振興部　科学の祭典事務局　FAX：03-3212-8449／saiten@jsf.or.jp

○お詫び：日本地質学会News２月号の“千葉大会ニュースNo.２未来を担う学校教育”の中に地元「千葉県地学会」と記載されていますが，「千葉県地学教育研究会」が正式名称です．ここに訂正し，お詫び申し上げます．

☆北海道支部 案内

総会・例会およびシンポジウムのお知らせ

地質学会北海道支部総会・例会を下記のように開催します．今回は新しい試みとして，和田恵治会員の協力を得て，札幌を離れて旭川で開催し，さらに講演会だけではなく地質巡検も行うことにしました．また松枝支部長が世話人となり，資源地質関係のシンポジウムも開催することになりました．北海道で一番の季節の中での開催です．支部会員だけではなく広く参加を募ります．

1．日程：
2004年5月29日（土）午後　総会・シンポジウム・例会・懇親会
2004年5月30日（日）　地質巡検
2．開催場所：北海道教育大旭川校
3．**シンポジウム：「北海道における熱水活動と鉱物資源の形成」**
世話人：松枝大治
4．巡検：「旭川周辺地域の地質」（リーダー：和田恵治・地徳　力）
5．一般講演
広く講演を募ります．講演時間は質問時間を含めて15分以内を予定しています．
講演希望者は，講演者・講演タイトル・連絡先を下記の連絡先までお知らせ下さい．講演締め切りは4月20日とします．

講演申し込み・問い合わせ先
060-0810　札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科・地球惑星科学専攻　中川　光弘
TEL：011-706-3520　E-mail : nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

☆中部支部 案内

2004年支部年会開催のお知らせ

中部支部では下記のとおり2004年支部年会を開催します．あわせてシンポジウムと地質巡検を計画しましたので，皆様是非ご参加ください．また中部支部では電子メールにてニュース等の配信を行っています．電子メール配信をご希望の方は中部支部事務局（担当竹内）宛お申し込みください．

日時：**2004年6月12日**（土）受付開始9：30
会場：富山大学理学部．富山大学への交通，キャンパスマップについては富山大学ホームページ（http://www.toyama-u.ac.jp/）を参照してください．
支部総会：10：00－11：30
シンポジウム：12：30－17：30「日本海と本州弧の形成・発展」

シンポジウムでは,主として以下の3点について議論する予定です．
(1) 日本海拡大前の地質構造の復元とフォッサマグナの起源
まず，昨年の支部年会シンポジウムでの，地質構造におけるロシア沿海州と中部日本の関係に関する議論を引き継ぎ，日本海拡大前の地質構造の復元とフォッサマグナの起源を議論します．
(2) 北陸第三系発達史の検討
本シンポジウムのメインテーマ．上記の議論をふまえた上で，地域をおもに北陸に限定した第三系の構造発達史モデルを，地質学・岩石学・古地磁気学などの観点から海域も含めて検討します．
北信越各県の第三系研究者の積極的な参加を期待します．
(3) 新潟ー神戸歪集中帯と日本海東縁新生プレート境界問題への展望
この20年間に，北信越地域のネオテクトニクスを研究する上で重要な，2つの問題提起がなされた．これに対して地質学はどのように回答できるのか．問題点を整理し，今後の調査研究と議論の方向を展望します．
参加費（総会・シンポジウム）：1,000円
懇親会：18：00－20：00（場所：富山大学内施設を利用予定，会費：4,000円を予定）
参加申し込み：総会・シンポジウムと懇親会の参加は当日まで受け付けますが，準備の都合がありますので，できる限り5月12日（水）までに参加内容（総会・シンポジウム，懇親会の別）連絡先（E-mailが望ましい）を明記して，E-mail，FAXまたは葉書にてお申し込みください．
E-mail： takeuchi@sci.toyama-u.ac.jp
FAX： 076-445-6658
葉書：〒930-8555　富山市五福３１９０
富山大学理学部地球科学科　竹内　章

巡検のご案内（予告）
シンポジウムに併せて，以下の要領で巡検を企画しました．ふるってご参加ください．
日程：6月13日（日）「東海北陸自動車道飛騨トンネル」
案内者：竹内　章・松原　誠・赤羽久忠
費用：4,000円　　定員：20名
日程：富山大学8：00集合，北陸道・東海北陸道経由で岐阜県白川村往復，富山駅18：00着
見学ポイント：今回は世界最大の新鋭トンネルボーリングマシンＴＢＭをもってしても難工事となっている東海北陸自動車道飛騨トンネル工事現場を見学し，作業坑切羽の濃飛流紋岩，ボーリングコア（部分的にカタクレーサイト化した片麻岩類）や地表の断層露頭などを調べながら，土木地質・応用地質の観点も含めて飛騨帯の濃飛流紋岩と活断層について現場討論をします．外界では，短時間ですが世界遺産合掌集落の観光気分も味わえます．
申し込み方法：参加希望者は，氏名，連絡先を明記の上，E-mail，FAXまたははがきにて上記総会申し込み先までお申し込み下さい．後日，巡検に関するご案内をお送りします．定員になり次第締め切らせていただきます．

なお，総会期間中の宿泊・交通については，最寄りの旅行社にご相談下さい．公共の宿には以下のようなものがあります．
・ＫＫＲ富山　銀嶺
〒930-0857富山市奥田新町5-8　TEL 076-432-7701
http://www7.ocn.ne.jp/~ginrei/
・呉羽ハイツ
〒930-0142富山市吉作4103-1　TEL 076-436-0191
http://www.kureha-heights.jp/
・パレブラン高志会館
〒930-0018富山市千歳町1-3-1　TEL 076-441-2255
http://www.koshikaikan.com/
・とやま自遊館
〒930-0805富山市湊入船町９－１　TEL 076-444-2100
http://www.jiyukan.or.jp/
下記のWebサイトも参考になると思います．
・富山県　http://www.pref.toyama.jp/

・富山市　http://www.city.toyama.toyama.jp/
・富山県観光連盟　http://www.kanko-toyama.or.jp/

以上に関するお問い合わせは，上記申し込み先（富山大学　竹内章）まで．

中部支部及び電子メール配信に関するお問い合わせは下記まで．

TEL：052-789-2525，またはE-mail:takeuchi@eps.nagoya-u.ac.jp

（事務局　名古屋大学　**竹内　誠**）

☆近畿支部・西日本支部・四国支部 案内

合同例会のお知らせ

日時：**2004年6月5日（土）～6日（日）**
場所：京都大学理学部6号館
年会内容：一般発表（口頭発表・ポスター発表），シンポジウム，懇親会
参加費：要旨集印刷+ポスターボード経費の実費

1．一般発表

口頭発表：1題20分（討論時間5分を含む），ポスター発表：横幅　約180×180cm

応募要領：「題名」「発表者」「連絡先メール」「口頭かポスターの区別」を明記．

応募締め切り：4月23日（金）（厳守）

講演要旨（口頭発表・ポスター発表とも，A4版2ページまで）体裁は地質学会年会要旨に準ずる．

講演要旨締め切り：5月7日（金）（厳守）

送付ファイル形式：講演要旨は，PDFもしくはWord形式で，電子メールに添付して送付下さい．

応募・講演要旨送付先：masuda-shibu@kueps.kyoto-u.ac.jp

2．シンポジウム

シンポジウム題名：「西南日本の中・古生代テクトニクス」

世話人：八尾　昭（代表），佐野弘好，西山忠男，村田明広，榊原正幸，西村祐二郎，今岡照喜，奥平敬元．

日時：6月6日（日）予定．

3．講演要旨集

講演要旨集は会場のみで配付．事前に参加希望を申し出た方に，実費で配付．

4．参加希望者

参加希望者は5月14日（金）までに，masuda-shibu@kueps.kyoto-u.ac.jpにお申込下さい．

5．問い合わせ

京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室
増田富士雄（電話075-753-4160，masuda@kueps.kyoto-u.ac.jp）

☆西日本支部 報告

例会・総会報告

第148回例会ならびに2003年度総会が，2004年2月14日（土）に広島大学理学部（E棟）で開催されました．今回の例会は，講演件数が54件と参加者87名を数え，西日本支部としては昨年に次ぐ大きな集会となりました．開催校の広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学教室の皆様には，総会・例会･懇親会会場の準備・運営等に大変お世話になりました．深く感謝申し上げます．なお，下記の講演要旨は西日本支部会報第124号に掲載されます．

口頭発表

1．九州東部・朝地変成岩の変成作用とテクトニクス：藤井正博°・早坂康隆（広島大・理）
2．CHIME年代測定法のためのシステム化と，いくつかの問題点について：早坂康隆°・大財健司（広島大・理）
3．中国地方の先白亜紀花崗岩類のCHIME年代と地体構造論：大財健司°・早坂康隆（広島大・理）
4．山口県西部に分布する最上部ジュラ系～最下部白亜系礁性石灰岩の堆積環境：白石史人°・吉冨健一・狩野彰宏（広島大・理）
5．熊本県に分布するデボン系内大臣層の層序と構造：桑水流淳二°（鹿児島県博）・宮本隆実・久保田敏充（広島大・理）
6．岡山県北西部の縞状トゥファ中の気候記録のプロセスと特徴：川合達也°・狩野彰宏（広島大・理）
7．ベトナム中部・コンツム地塊に分布する変成岩類の変成作用と変成年代－SHRIMP年代測定の意義－：中野伸彦°・小山内康人（岡山大）・大和田正明（山口大）・T. N. Nam（フエ大）・豊島剛志（新潟大）・角替敏昭（筑波大）・外田智千・白石和行（総研大）
8．スリランカ・UHTグラニュライトのP-T履歴：小山内康人°・K. Sajeev（岡山大）・大和田正明（山口大）・K. V. W. Kehelpannala（スリランカ基礎科学研）・W. K. B. Prame（スリランカ地調）
9．白亜紀引張テクトニクスによる中・下部地殻の上昇：北部九州バソリスの例：大和田正明（山口大・理）
10．北ベトナム白亜紀Yenchau盆の堆積相解析とインドシナの白亜紀テクトニクス：坂井卓°（九州大）・坂幸恭・平野弘道・加藤潔・太田亮（早稲田大）・安藤寿男（茨城大）・Le Thi Nghinh（ベトナム地質科学研）・Ngoc Nguyen Linh・Khien Nguyen Xuan（ベトナム地質鉱物資源研）
11．九州北部，耶馬渓地域に分布する鮮新世河川堆積物：木戸道男°（黒木高校）・英彦山団研グループ
12．アンチデューン条件下における細粒砂濃集層の形成：山崎春菜°・宮田雄一郎（山口大・理）
13．沖縄県宮古島地下ダムコアにみられる琉球層群の層序と堆積環境：溝田あゆみ°（熊本大・院・自然）・松田博貴（熊本大・理）
14．鍾乳石から陸域環境変動は読み取ることは可能か？？：松田博貴°（熊本大・理）・洲脇美智子（熊本大・院・自然）・首藤寛之（熊本大・理）
15．湖沼年縞堆積物の珪藻化石群集と花粉組成に基づく高精度古環境解析：安藤優子°（熊本大・理）
16．熊本市西部金峰山地域芳野層の珪藻化石群集に基づく水域 環境変遷：打越山詩子°・長谷義隆（熊本大・理）
17．大分市周辺の丘陵地から別府湾に分布する碩南層群・大分層群の地質：竹友祥平°（熊本大・院・自然科学）・本座榮一（熊本大・理）
18．鹿児島県八重山地域に分布する郡山層の層位学的研究：内村公大°（鹿児島大・院・理工）・大木公彦（鹿児島大・総合研究博物館）・古澤明（古澤地質調査事務所）
19．鹿児島県上甑島の構造発達史：藤内智士°・清川昌一（九州大・理）
20．熊本県牛深市大島に分布する上部白亜系姫浦層群の堆積環境と二枚貝化石群：熊谷太朗°・小松俊文（熊本大・理）
21．山口県秋吉台佐山地域におけるMoscovian-Kasimovianの層

序： 奥原嗣雄°・上野勝美（福岡大・理・院）
22. 鬼界カルデラでのバイモーダルマグマ活動の成因に関する岩石学的研究：當山珠代°・新城竜一・加藤祐三（琉球大・理）
23. 南九州川内玄武岩類の二つの対照的な初期風化過程：林佳奈子°・山本温彦（鹿児島大・理）
24. 野母半島の長崎変成岩類中に産する花崗岩質岩石： 中原伸幸°（広島県立高陽東高校）・西村祐二郎（山口大・理）
25. アラゴナイト－溶液反応による$CaCO_3$-CaMg（CO_3）系炭酸塩鉱物の形成過程：高山尚己（熊本大・院・自然），磯部博志（熊本大・理）
26. 微分干渉顕微鏡下における石英のマイロナイト組織と動的再結晶メカニズム：梅崎基考（熊本大・院・自然）・豊原富士夫（熊本大・理）

ポスター発表

P1. 西日本内帯の中・古生界砂岩中の砕屑性ザクロ石：冨永満生°・宮本隆実・山元大介（広島大・理）
P2. 砕屑性堆積岩による酸性マグマの同化・汚染の一モデル：山本温彦°（鹿児島大・理）・川野良信（佐賀大・文化教育）
P3. 有明海の春季の水塊分布と海底環境との関係 -2003年5月の海洋調査と河口域の環境資料に基づく解析-：秋元和實°（熊本大沿岸環境教育研究センター）・長谷義隆・松田博貴・小松俊文・田中正和・小田真優子・大久保功史・平城兼寿（熊本大・理・地球科学）
P4. 長崎県五島列島・玉之浦地域の地質：山本紋子°・清川昌一（九州大・理）
P5. 鹿児島県甑島列島周辺の海底地形図と中甑島／下甑島の地質：大岩根尚°・清川昌一（九州大・理）
P6. 南九州川内川の水質：布計鉱床地域の高硫酸根を含む河川水：西中須暁子°・山本温彦（鹿児島大・理）
P7. 沖縄県西表島浦内川流域の有孔虫群集：星野尚子°（熊本大・理）・田中啓子・阿部恒平・長谷川四郎（熊大・院・自然）
P8. 浅海海底に横たわる巨大生物遺体周辺に出現する特殊な化学環境と化石化過程の研究－一昨年投入されたクジラ遺体と第三紀クジラ化石との比較－：尾崎健一°・山中寿朗・下山正一（九州大）・溝田智俊（岩手大）・堤裕昭（熊本県大）・佐藤慎一（東北大）・藤原義弘（海洋科技センター）
P9. 特殊な環境から発見された二枚貝化石が化学合成生物か否かを判別する方法の開発とその応用例－化石有機物の安定同位体組成に基づく分析－：前 鮎美°・山中寿朗・下山正一（九州大）・溝田智俊（岩手大）・堤裕昭（熊本県大）・國丸貴紀（核燃料サイクル開発機構）
P10. 別府湾地溝の南側地塊における第四紀層序と地層変形形態について：兵頭智至°・下山正一（九州大）・竹村恵二（京都大）
P11. バイカル湖およびフブスグル湖域における最終氷期以降の植生変遷に認められる高度の影響：梅田一°・長谷義隆・中村俊夫・尾田武文（熊本大・理）
P12. 岡山県北部地域における舞鶴帯と三郡帯との構造地質学的関係：岩崎泰典°・早坂康隆（広島大・理）
P13. 巨大礫岩を伴う地層の解明（長崎県五島列島奈良尾地域の例）：小牟礼麻依子°・清川昌一（九州大・理）
P14. 熊本県天草下島に分布する古第三系砥石層の堆積環境とその変遷：斎藤竜輔°（熊本大・院・自然）・松田博貴（熊本大・理）
P15. 奈良県入之波温泉トラバーチンの堆積組織と地球化学的プロセス：高島千鶴°・狩野彰宏（広島大・理）
P16. 岡山県備中町のトゥファ堆積場周辺の水文地質学： 堀 真子°・狩野彰宏（広島大・理）
P17. 宮古島のトゥファに記録された地球温暖化と地下水系の変化：萩原リサ°・狩野彰宏（広島大・理）
P18. 鹿児島県獅子島と熊本県御所浦島に分布する”中部”白亜系御所浦層群のアンモナイトによる層序対比：筑紫健一°・小松俊文（熊本大・理）
P19. 下部ジュラ系豊浦層群と樋口層群の化石群の比較：永田紘樹°・小松俊文（熊本大・理）
P20. 徳島県吉野川流域の第四系と地形：今井悟史°・橘徹・鈴木茂之（岡山大・理）
P21. 岡山平野における上部更新統～完新統の層序と堆積環境：伊藤康二°・鈴木茂之（岡山大・理）
P22. 上部三畳系成羽層群の堆積相と砂岩粒度組成：増沢俊英°・鈴木茂之（岡山大・理）
P23. 熊本県矢部町周辺の肥後変成岩類中のザクロ石角閃岩：福永義信°（熊本大・院・自然）・西山忠男（熊本大・理）
P24. 中・北部九州における鮮新世化石植物群：田中慎吾°（熊本大・院）・長谷義隆（熊本大・理）
P25. 長崎県池島炭鉱における地下水の同位体特性：小野雅弘°・田中和広（山口大）・中田英二・大山隆文（電力中央研究所）
P26. 山口県の鍾乳洞における滴下水の酸素・水素同位体特性：ベル朝哉°・田中和広（山口大・理）・嶋田 純（熊本大・理）
P27. 芦屋層群最上部脇田層における堆積相とシーケンス層序：安田和代°・坂井卓（九州大・理）

（°：講演者）
（記 **下山正一**）

西日本支部例会，ポスター（左）・口頭（右）発表会場の様子

第５回アジア海洋地質会議，第１回IGCP-475年会参加報告

北沢俊幸
（信州大学工学系研究科博士後期課程）

2004年１月にタイで行われた２つの国際会議について，その様子を報告する．１月13-18日にはバンコクで第５回アジア海洋地質会議：The Fifth International Conference on Asian Marine Geology（ICAMG-V）が開催された．それと一部日程が重複し16-20日にはIGCP-475「モンスーンアジア太平洋地域におけるデルタ：Deltas in the Monsoon Asia-Pacific region（DeltaMAP）」の第１回年会が開催された．なお，DeltaMAPの年会はアジア太平洋ネットワーク（APN）のメガデルタプロジェクト（Mega-Deltas of Asia）との共催であった．

第５回アジア海洋地質会議（ICAMG-V）

ICAMG-Vはバンコク市内の空港に近いホテルで行われ，参加者の多くは同ホテルに宿泊した．25か国ほどから200人以上の参加者数があり，多い順に中国，韓国，タイ，日本，ベトナム，ドイツと続いた．その他にも北米やヨーロッパからの参加者も意外と多かった．日本人研究者は25人程度でうち７人ほどが学生であった．会議中は多くの基調講演がなされたほか，最大時には3部屋に別れて口頭発表が進行した．各セッションはQuaternary sea-level changes & strata formation, Oil and gas-hydrate resources and active sea-bottom phenomena, Sedimentology & “source to sink” at Asian continental margins, Indonesian Through Flow & paleoceanography, Monsoon evolution and tectonics & climatic linkage in marginal seas, Human impacts on coastal zones & data management, Tectonic & stratigraphy at Asian continental margins, IGCP475 DeltaMAP & APN Mega-Deltasというものだった．ポスター発表も多くあり，コーヒーブレイク中や昼休みにはポスターの前で活発な議論がなされていた（図１）．筆者のポスターはベトナム南部の更新世段丘の層序と光励起ルミネッセンス（OSL）年代に関してだったが，このような国際会議では地域地質はあまり興味を引かないようで，質問はOSL年代測定法に関するものが主であった．

バンコクでの会議終了後行われた打ち上げパーティーは，参加者とスタッフで貸し切りの大きな船によるチャオプラヤ川クルーズであった．チャオプラヤ川にかかる橋や川沿いの寺院の夜景を楽しみながらおいしいタイ料理を頂いた．タイの女性シンガーに乗せられて合いの手を入れたり一緒に踊ったりする研究者らもいて楽しいものであった（図２）．なお，次回のICAMGは2008年にJAMSTEC，産業技術総合研究所，東京大学海洋研究所の主催で日本で開催される予定である．

図２．チャオプラヤ川クルーズ．女性シンガーと一緒に踊る各国の研究者らも

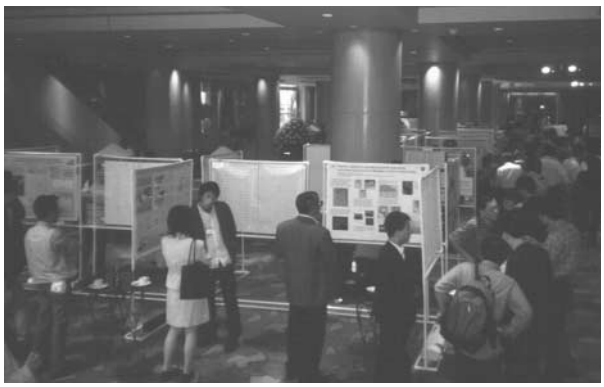


図１．ポスター会場

巡検

会議のあとに行われた巡検（１月17-18日）ではチャオプラヤデルタ西部の海側地域を見て回った．約80人が参加し大型バス2台で移動した．Stop１ではボートに分乗して海岸侵食の様子を見学した．電線がついたままの電信柱が海の中に沢山立っていた．1906-1996年の間に400-600mもの海岸侵食が起きたという．さらに最近44年の平均侵食速度は12m/年にもなるという．侵食の要因は上流部でのダム建設による河川からの堆積物供給量の減少，季節風による強い波の侵食作用，エビなどの養殖池を作るための人為的なマングローブ林の消失らしい．最近の調査によれば，今後さらに100mは侵食が進むとされており深刻な問題である．Stop２は露天掘りの採土場で完新世チャオプラヤデルタの堆積物を基底部から観察した（図３）．完新世デルタ堆積物を露頭で基底から見ることができるのは非常に珍しい．周辺に分布するより古い地層を侵食し，堆積したファンデルタ堆積物であるという解釈であったが，非常に細粒な堆積物であり日本人がイメージするファンデルタ堆積物とは全く異なるものだった．Stop３ではハンドオーガーでとられた泥をめぐって海成か陸成かといった議論がビールを片手に盛んになされた．

第１回IGCP-475，APNメガデルタプロジェクト年会

IGCP-475とAPNメガデルタの発表の一部はバンコクのICAMG-Vに含まれる形で行われ，巡検のあとアユタヤのホテルで本格的に開催された．アユタヤはバンコクの80km北に位置する約600年前の王国の古都である．参加者は40人ほどで緩やかなスケジュールの中で行われた．基調講演以外の一般発表は全てポスター発表であり，会議中はポスターがずっと張り出されていた．筆者はベトナムのメコンデルタ東方の更新世段丘堆積物の古環境と段丘面の成因について発表した．ポスターの前の短い議論ではあったが本質的な議論ができ，さすがに世界の第一線で活躍している研究者は鋭いと感じたものである．

基調講演で印象に残ったのは堆積相の教科書「Facies Models」のデルタの章を書いたJanok P. Bhattacharya博士による講演であった．主題はデルタ堆積物を対比する際，堆積相境界をまっすぐ引くかジグザグに引くかという誰にも分かり易い問題提起だった．これはデルタに限らず地層一般の問題であると思うが，地質調査や地層の対比をしているとしばしば突き当たる問題であろう．Bhattacharya博士は堆積相境界は本質的に指交関係にあるためジグザグに描き表すべきだと主張し，そのモデルを示していた．当然

図３．巡検Stop２．完新世デルタ堆積物を基底部から観察できる

反対意見も多くあり，各分野の研究者らの議論は白熱したものとなった．そして彼らもその議論を楽しんでいるように見えた．このような議論に多くの時間を割けるのもスケジュールが緩やかで柔軟だったからであろう．

興味深かったのはグループディスカッションであった．海外ではよくあるものらしいが，筆者にとっては初めての経験であった．参加者が各テーマのグループに分かれて１時間以上議論したり情報交換したり，ある取り決めをしたりする（図４）．その後，各グループで話し合われたことが口頭で皆に報告される．自分の研究分野と関連する研究者とは個人的に話すことはあっても一同に会することはなかなかないものであるが，この場で知り合ったり新たな協力体制などができる所にメリットがある．１日目はHuman impacts and consequences, Hydrology and sedimentary processes, Monsoons and climate change, Delta evolutionというグループに，２日目は地域ごとに南アジア，東南アジア，東アジア，オセアニアというグループに別れて話し合いが持たれた．

なお，第２回IGCP-475年会は2005年にベトナム（ホーチミン）で開催されることとなった．そして筆者のフィールドが巡検地の一つとして組み込まれることとなった．沢山の参加者，活発な議論を期待しているが，日本人とベトナム人以外を案内するのは初めてのことなので周到な準備をしなければならないと思う．

図４．グループディスカッション「東南アジア」．日本，ベトナム，カンボジア，ドイツ，インド，フィリピンの研究者らが集まった

おわりに

今回この国際会議に出席し，海外の研究者と会って話をしたり，自分の研究について議論したり助言を頂いたり，ドイツの学生と相部屋をしたりなど有益な経験をすることができた．筆者はベトナムでの野外調査の帰りにタイに寄ったため，調査道具一式やサンプルなどで70kg近い荷物がありそれを抱えて移動しなければならなかったが，大変な思いをしたかいもあったと思う．

関連するウェブサイト

（第５回アジア海洋地質会議）
http://www.geocities.com/geology5th/
（アジアデルタプロジェクト）
http://unit.aist.go.jp/mre/mre-cev/ADP/index.html

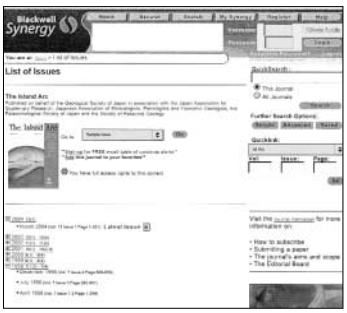
常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の３名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

tomaru@gbs.eps.s.u-tokyo.ac.jp　戸丸　仁（東大）
t02h106@amail.shinshu-u.ac.jp　北沢俊幸（信州大）
a.takahashi@fuji.waseda.jp　高橋昭紀（早稲田大）

The Island Arcオンライン閲覧（登録）の方法

The Island Arc誌をオンラインで見たいが，その方法がわからないという問い合わせが多く寄せられています．次のように登録して，ご覧ください．

１．学会HP中の「The Island Arc」をクリック．
２．「オンライン閲覧」をクリック．
３．**http://www.blackwell-synergy.com/**をクリック．
４．画面右上「**register**」から**Username**と**Password**をはじめに登録（個人登録）します．
５．次に**会員特別登録**を行います．画面右上の「**My Synergy**」をクリック．
６．中ほどにある「**Access**」をクリックし，「**Offer Codes**」に**JGS**と入力し，「**Continue**」をクリック．
７．名前とIDの両方に**７桁の会員番号**を入力．これで会員特別登録は終了です．会員特別登録ははじめの１回のみ行います．
８．「**Journal**」をクリックし，「**The Island Arc**」を選択．読みたい論文を探し，閲覧して下さい．
９．登録後は，**Username**と**Password**を入力して「**Login**」→「**My Synergy**」でThe Island Arcが閲覧できます．



The Island Arc連絡調整委員会

The Island Arc

追　悼

名誉会員　早川正巳先生

早川名誉会員は，平成15年11月27日，肺炎のため永眠されました．当年満90歳でした．心から哀悼の意を表します．

早川先生は，大正２年９月４日大阪市此花区でお生まれになり，昭和13年東京大学理学部地震学科をご卒業後，参謀本部陸地測量部（現国土地理院），大阪管区気象台，名古屋大学理学部，産業技術総合研究所（旧工業技術院地質調査所），東海大学海洋学部，早稲田大学などにおいて，地震・火山・地熱・物理探査の研究など地球物理学の基礎と応用を含む広い分野にわたって研究，教育活動に従事されました．

早川先生は，昭和23年以来，50年間にわたり日本地質学会会員として活動してこられ，平成11年に名誉会員となられました．他にも物理探査学会，日本地熱学会，石油技術協会，日本火山学会の名誉会員にも推挙されていることからもその幅広いご活躍が裏付けされます．

先生の研究に対する真摯な姿勢をしたって多くの学生や若手研究者が集まり，先生はこれらの人たちを鼓舞し，励まされて多くの地質・地球物理学の研究者を育てました．薫陶を受けた多くの人たちが，物理探査業・地質業の実業界の一線で活躍しています．

特筆すべき早川先生の業績としては，戦時中の庄内平野における石油探査で油田の採油と共に地層の中を通る弾性波の速度比が，時間と共に変化することに着目し，このことが地下の貯留層／帯水層の挙動に関係していることを推察されたことです．この発想を展開させて地震発生前後の地震波速度の時間的変化の問題を追求し，さらに地震発生の際の熱の役割に関する研究などに発展させました．地震予測に関して，地球物理学の分野だけでなく地質学の分野へも大きな貢献と，重要な問題提起をされてきました．

また，火山地域の重力・地磁気の研究では，昭和新山の地球物理の研究があります．これは戦後の物資のない時，様々に工夫を凝らして物理探査を行い，火山活動の変遷を明らかにしたものです．この延長で火山学・地質学の分野の方々と協力して，我が国最初の松川地熱発電の技術開発に成功され，地熱エネルギー利用に大きな貢献をされました．この業績により，科学技術庁長官賞，紫綬褒章を授与されました．

早川先生は，東海大学時代に地質学者と協力して地球物理学と地質学との境界領域に関する数かずのシンポジウムを開催されました．昭和53年の日本地質学会総会及び年会（東海大学）では特別講演「熱の要素を考慮に入れた地殻の研究」をおこない，これまでの研究成果を発表されるとともに今後の課題を提示されました．それらの成果は，後年の「伊豆半島」，「中央構造線」，「地震－地震学者と地質学者の対話－」「日本海の地質」などの単行本に収められています（いずれも東海大出版）．研究成果は論文のほかに，普及書として，「地熱」－第四のエネルギー－（NHK出版：1970），「物理探査」－資源開発から自然認識へ－（NHK出版：1975），「地熱発電」（丸善：1967）等に，さらに専門書として，「地球熱学」（東海大出版：1988），「Geothermy」（共著；東海大出版：1992）なども出版されました．

また，先生は卓越した語学能力で，英語，ドイツ語，フランス語，ロシア語，ラテン語などをマスターされ，インド・オスマニア大学客員教授（地質学教室，主任教授），国連ESCAP-CCOP*の特別顧問，1976年からは同委員会の名誉顧問として国際的にも活躍されました．

先生は，いつも若い人に熱情を持って接し，亡くなるまで地殻の熱の本質に迫るべく挑戦を続け，地震との関わりを探求されておられました．先生は，真面目すぎるがために，色々なエピソードを残しておられますが，多くの人はそれらのことを懐かしく思い出されることでしょう．先生のご冥福をお祈り致します．

ご遺族は，奥様の早川綾子様で，〒212-0052　川崎市古市場1-53にお住まいです．

（安間　恵）

*CCOP：Co-ordinating Committee of Offshore Prospecting

研究室のミニ工場

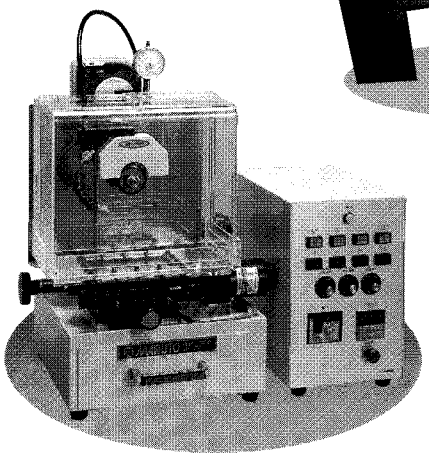
マルトーの ラボ・ファクトリープラン 3点セット

分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

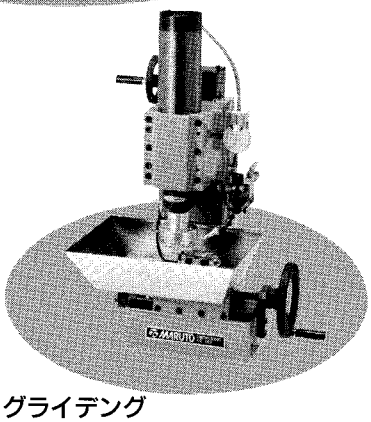
小さな機械(なり)だが役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

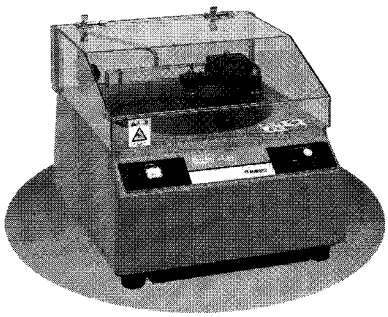
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。
(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工)



カッティング
連続・浅切込みができる
ステップカッター
〔MC-170Y〕
- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm／pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 185万円～



グライデング
立軸平面研削機
プレパラップ
(MG-300)
- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



ポリッシング
精密鏡面研磨機
ドクターラップ
〔ML-180〕
- 組織検査用試料のラッピング・ポリシング
- アクセサリー豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

株式会社マルトー
本　社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10
☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル
☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288
E-mail:maruto@maruto.com http://www.maruto.com

©日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp